
3W -What a Wonderful World-

卯月弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3W — What a Wonderful World —

【Nコード】

N3149G

【作者名】

卯月弥生

【あらすじ】

木々は緑色に、赤いバラは、また私やあなたのために花を咲かせ、そして私の心に沁みてゆく。何と素晴らしい世界だろう。空は青く、雪は白く、輝かしい祝福の日には、神聖な夜と、そして私の心に沁みてゆく。何と素晴らしい世界だろう。空にはとてもきれいな虹がかかり、また人々は通り過ぎながら、初めましてと言ったり、友達が握手したりしているのを見かけます。彼らは心から「愛している」と言い、私は赤ん坊が泣くのを聞いたり、成長してゆくを見ています。彼らは私よりも遥かに多くのことを学び、知ってゆくだろう。

そして私は心の中で思っています。何と素晴らしい世界。ええ、私は心の中で願っています。何と素晴らしい世界なんだろう。

午前六時の町並みにはまだ静寂が満ちていた。西の空はまだ暗く、東の空は徐々に白み始めている。冬の早朝は、世の中で一番静謐な空気を醸している。澄んだ冷気を暖めるために太陽が出てくるまでにはまだ時間があった。人びとが息を潜め、一日の始まりを待ち望む中、斉藤は一人歩いていた。

斉藤は考える。この世の中は理不尽だ。上手くいくやつは何もしなくても上手くいくのに、上手くいかないやつは何をしても上手くいかない。

恋愛だって同じだ。僕がこれだけ愛したって彼女には届かなかった。

斉藤は一ヶ月前に彼女が好きだということに気づいた。彼女は斉藤の職場の後輩だった。最初は天真爛漫でコロコロと気分を変える彼女のことが、斉藤は苦手だった。

斉藤は一度彼女に尋ねたことがあった。

「なんでそんなにいつも笑っているの？」

彼女は言った。

「だって悩んでたって何も変わらないじゃないですか。それだったら悩むのを止めて笑ってたほうが良いと思いませんか？」

思慮深く、何事に対しても慎重に時間をかけて考える斉藤にはそんな彼女の考え方は理解できなかった。

それから彼女とはそんな話をするが多かった。その中で、彼女のその笑顔に斉藤は引かれていった。

そんな矢先に、彼女から衝撃的な言葉を聞いた。

彼女に、彼氏が出来たらしい。

普段は雑踏や貨物であふれる都市の大動脈も、早朝ともなると人

も車もまばらだ。ましてやこの辺りは中心街からは少し外れた住宅地で、たまにジョギングをする人とすれ違う程度である。

西の空も紺色から水色へと変化してきた。東の空はもうオレンジ色に染められ、太陽がいまにも頭を出しそうになっている。澄んだ冷気はまだ早朝を満たしているが、間もなく太陽がその張り詰めた空気を綻ばせる。そうすると、凍っていた世の中は動き出し、また一日が始まる。

しかし、そんなことは斉藤にとってはどうでもよかった。冷気は容赦なく斉藤の体を襲い、手足は冷え切り痛みすら感じていたが、そんなことはどうでもよかった。

彼女のその言葉を聞いたのは、昨日の飲み会であった。ワイワイ盛り上がっているうちに、話の流れが恋愛話になり、彼女に話が振られた。

「なんか知らないうちにそういうことになってました」

少し照れながらも淡々と話す彼女を、僕は見ていられた。同僚が何か細かいことを聞いていたようれど、僕は何も覚えていない。ただ、いま幸せ？と聞かれた時の彼女のはにかんだ笑顔がいつまでも目に焼きついている。

西の空は完全に水色に染まり、東の空は更にオレンジ色が強くなってきた。高い建物の上にはすでに陽の光が当たっていて、世の中が動き始めた。

来週行くはずだった彼女とのレジャーは断る事にしよう。彼氏に悪いし、なにより自分が惨めになるだけだ。

そう、俺は惨めだ。好きな女に彼氏が出来たぐらいでうじうじと何週間も悩み苦しみ、後悔する男だ。いつそのこと死んでしまえば楽になれるのに。何も楽しくないし、希望も糞もない。あるのは心に空いた風穴だけだ。

斉藤は家路に着くでもなくぶらぶらと歩き回っていた。どこをど

う歩いたのかは覚えていないが、いつの間にか近くの神社に来てしまったらしい。

この神社は高台あるため、見晴らしがいい。斉藤はなんとはなしに神社の境内脇の柵に肘をついてもたれかかった。

そこからは眼下に広がる風景を一望出来る。手前に交通量の多い片側二車線の国道が走っていて、その先には田園が広がっており、遠くには大宮の町並みが見える。

そして、遮るものが何も無いその場所からは、朝日が昇ってくるのがよく分かった。オレンジ色の陽光が斉藤の全身を暖かく包み込む。

その時斉藤は思った。

ああ。世界はなんて素晴らしいんだろう。

全てに光を与え、世界を照らし出す太陽。世の中の凍った時間を溶かし、一日の始まりを告げる半鐘を静かに鳴らし始める。人びとはその光を受け、今日も生きていく。

斉藤の心の中で何かが変わった。暗く陰っていた心に、その陽光は明るさと暖かさを差してくれた。

そうだ。世界はこんなにも素晴らしい。僕がどんなに苦しくても、世の中がどれだけ理不尽でも、世界はこんなに素晴らしいんだ。いつまでもくよくよしていても仕方がない。この素晴らしい世界で、僕は生きているんだ。

きっとこれからも辛い事はあるだろう。理不尽なこともあるだろう。でも、この素晴らしいさに感動できるうちは、僕は頑張って生きていこう。この暖かさに癒される間は、僕はこの素晴らしい世界で生きていこう。

斉藤は踵を返し家路を急いだ。自然と足取りも軽くなる。ジョギングの最中らしい男性にすらおはようございますと声をかけたくなくなる。

こうなったら寸暇を惜しんで世の中を楽しもう。よくある文句だけど、彼女だけが女じゃないんだ。今日は家に帰ってぐっすり寝て、明日になったら美味しいもの食べて、家でゴロゴロしながら溜まっていた本でも読もう。お気に入りのCDをかけながら、ゆっくりと休日を過ごそう。世の中は理不尽だけど、こんなにも素晴らしいんだ。ただ、いつかこの素晴らしい世界にすら嫌気が差したときには。

それは、その時考えればいいか。だって悩んでたって僕も、彼女も、世界も何も変わらないじゃないか。それだったら悩むのを止めて笑ってたほうが、幸せになれるはずだからね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3149g/>

3W -What a Wonderful World-

2010年10月8日15時17分発行